

肝吸虫症の臨床的研究, とくに胆のう, 胆管造影所見について

| | |
|-----|---|
| 著者 | 渡辺 志津一 |
| 号 | 491 |
| 発行年 | 1968 |
| URL | http://hdl.handle.net/10097/18555 |

氏 名 (本 籍)

わた なべ し ず もと
渡 辺 志 津 一

学 位 の 種 類

医 学 博 士

学 位 記 番 号

医 第 4 9 1 号

学位授与年月日

昭 和 4 3 年 3 月 4 日

学位授与の要件

学位規則第 5 条第 2 項該当

最 終 学 歴

昭和 3 2 年 3 月
福島県立医科大学卒業

学 位 論 文 題 目

肝吸虫症の臨床的研究，とくに胆のう，胆管
造影所見について

(主 査)

論文審査委員 教授 山 形 徹 一 教授 星 野 文 彦

教授 楨 哲 夫

論 文 内 容 要 旨

わが国では古くから肝吸虫 (*Clonorchis sinensis*) が発見され、宮城県は有数の浸淫地となつてゐる。私は肝吸虫症の臨床的観察の一環として、経静脈法による胆のう・胆管造影をおこない、肝吸虫の体内寄生部である胆管系の観察をおこなつたので報告する。私は宮城県内でも肝吸虫浸淫の濃厚な北上川流域河口部に位置する桃生郡北上町住民を対象とし、セロファン厚層塗抹一回法による糞便虫卵検査で検出された144名中、現症調査および肝機能検査をおこなつて異常をみとめられない74名を肝吸虫群とした。また肝吸虫の非浸淫地区でおこなつた過去4年間、4回の糞便虫卵検査による肝吸虫卵陰性者のうち、臨床的に肝および胆道疾患の認められない29例を対照群とした。胆のう・胆管造影は両群全員に50%ピリグラフィンによる経静脈法を用い、腹臥位で10~30°の第二斜位をとり、背腹方向に撮影をおこなつた。撮影時間は50%ピリグラフィン注射後15分、30分、45分、60分、90分、120分および卵黄摂取後30分で、計7枚のレ線像から、肝内胆管、胆のう管、肝管・総胆管、および胆のうについて、肝吸虫群、対照群の比較検討をおこなつた。各部の造影率をみると、肝内胆管では肝吸虫群88%、対照群90%とほぼ同率を示し、胆のう管はそれぞれ54%、83%と対照群の造影率が高い。肝管・総胆管はそれぞれ99%、100%と差がない。肝内胆管陰影の出現する時間をみると、肝吸虫群では77%、対照群では92%が15分以内に出現し、肝吸虫群ではやや出現の遅延がみられるが、両群とも30分以内にその殆んどが出現している。また出現した肝内胆管の陰影持続時間をみると、両群ともほぼ40%が120分持続している。肝内胆管の分枝の出現状態は、左右固有肝管の3枝がみとめられるものは肝吸虫群54%、対照群46%を示し、左右2枝状のものは、それぞれ31%、46%、右側だけ2枝に造影されるものは肝吸虫群のみ8%、右側1枝のものは、それぞれ5%、8%で肝吸虫群は対照群に比べて左右2枝状のものが少ない。固有肝管分枝の造影能をみるため、その分岐部について検討すると、第1分岐部すなわち固有肝管の分岐点だけみとめられるものは、肝吸虫群では29%であるが、対照群では69%と多く、それより末梢に第2分岐部のみとめられるものはそれぞれ35%、31%である。すなわち対照群では造影された肝内胆管の全部は第2分岐部までみとめられるだけであるが、肝吸虫群では第3分岐部以上造影されているものが36%に達している。肝内胆管の最大径の計測ではその平均値は肝吸虫群で3.0mm、対照群では1.8mmで、肝吸虫群では対照群に比べて管径の拡張しているものが多い。肝管・総胆管の陰影出現時間をみると、15分以内ではそれぞれ8%

%、97%で、肝吸虫群でやゝ遅延するものがあるが、両群とも30分以内にすべて出現している。その陰影持続時間は両群とも差がなく、ほと50%は150分まで造影されている。肝管・総胆管の造影状態は、全長にわたり造影されるもの、総胆管の一部造影せるものについて検討をおこなったが、両群ともほぼ同率である。またその最高濃度を東北大山形内科の判定基準により両群を比較すると肝吸虫群でI度のもが多い、肝管・総胆管の最大径の計測では、その平均値はそれぞれ5.8mm、4.9mmであるが、対照群はすべて7mm以内であるのに対して、肝吸虫群では管径の大きいものがあり、ことに7例では10mm以上の値を示している。肝内胆管、肝管・総胆管管径計測値の比より、その相互関係をみると、肝吸虫群では肝管・総胆管管径がほぼ正常に近いのに、肝内胆管は末梢にいたるまで拡張がみられる。肝吸虫群の肝内胆管は大部分が総胆管の半分以上の太さを示し、とくに8例では肝管・総胆管とほぼ同大の内径を示している。しかるに対照群では、肝内胆管は肝管・総胆管と比べて漸次的に細くなり、それ以上レ線上たどることができない。胆のうの造影濃度は両群とも差がなく、その最高濃度到達時間は肝吸虫群ではやゝ早い傾向にある。胆のうの収縮能はやゝ肝吸虫群に不良のものが多い。また結石陰影をみとめるものは2例で、いずれも陰性陰影を示し、既往、自覚症状とも特記すべきものはなく、肝吸虫と結石の関係については、明らかにできなかつた。肝吸虫群のうち7例に腹腔鏡検査ならびに肝生検をおこなったが、5例に肝破膜、あるいは肝縁に線維化肥厚がみられた。また肝生検では全例に中心静脈の著明な拡張がみとめられ、また3例に肝細胞の色素顆粒沈着がみられたが、肝吸虫寄生肝にみられるとされる胆管の拡張、増生、炎症性変化等は殆んどみられなかつた。これは対象がいわゆる肝吸虫症の軽症例であつたためと考えられる。

審 査 結 果 の 要 旨

著者は肝吸虫症の臨床的観察の一環として、経静脈法による胆のう・胆管造影をおこない、肝吸虫の体内寄生部である胆管系の観察をおこなったが、セロファン厚層塗沫一回法による糞便虫卵検査で検出された144名中、現症調査および肝機能検査をおこなって異常をみとめられない74名を肝吸虫群とし、4回の糞便虫卵検査による肝吸虫卵陰性者のうち、臨床的に肝および胆道疾患のみとめられない29例を対照群とし、胆のう・胆管造影は両群全員に50%ビリグラフィンによる経静脈法を用い、肝内胆管、胆のう管、肝管・総胆管、および胆のうについて、肝吸虫群、対照群の比較検討をおこない、次の成績を得ている。すなわち対照群では造影された肝内胆管の全部は第2分岐部までみとめられるだけであるが、肝吸虫群では第3分岐部以上造影されているものが36%に達している。肝内胆管の最大径の計測ではその平均値は肝吸虫群で3.0 mm、対照群では1.8 mmで、肝吸虫群では対照群に比べて管径の拡張しているものが多い。肝管・総胆管の陰影出現時間をみると、15分以内ではそれぞれ89%、97%で、肝吸虫群でやや遅延するものがあるが、両群とも30分以内にすべて出現している。その陰影持続時間は両群とも差がなく、ほぼ50%は150分まで造影されている。肝管・総胆管の造影状態は、全長にわたり造影されるもの、総胆管の一部造影せるものについて検討をおこなったが、両群ともほぼ同率である。またその最高濃度を東北大山形内科の判定基準により両群を比較すると肝吸虫群ではI度のものが多い。肝管・総胆管の最大径の計測では、その平均値はそれぞれ5.8 mm、4.9 mmであるが、対照群はすべて7 mm以内であるに対して、肝吸虫群では管径の大きいものがあり、ことに7例では10 mm以上の値を示している。肝内胆管、肝管・総胆管管径計測値の比より、その相互関係をみると、肝吸虫群では肝管・総胆管管径がほぼ正常に近いのに、肝内胆管は末梢にいたるまで拡張がみられる。肝吸虫群の肝内胆管は大部分が総胆管の半分以上の太さを示し、とくに8例では肝管・総胆管とほぼ同大の内径を示している。しかるに対照群では、肝内胆管は肝管・総胆管に比べて漸減的に細くなり、それ以上レ線上たどることができない。胆のうの造影濃度は両群とも差がなく、その最高濃度到達時間は肝吸虫群ではやや早い傾向にある。胆のうの収縮能はや肝吸虫群に不良のものが多い。また結石陰影をみとめるものは2例で、いずれも陰性陰影を示し、既往、自覚症状とも特記すべきものはなく、肝吸虫と結石の関係については、明らかにできなかった。

依つて本論文は学位を授与するに値するものと認める。